

---

hakusin

坂本三太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

h a k u s i n

### 【Nコード】

N 1 2 4 8 B

### 【作者名】

坂本三太郎

### 【あらすじ】

老人にあこがれていた少年がぶじ大学生になるといふはなしです。

(前書き)

だめでもともとです。見ないでもいいです

少年は老人に憧れた。お互いとお互いを憐れみ合う生活態度が好きでうらやましかったのである。

老人と若者の大きな違いは身の程をよくわきまえてる姿と仲間を憐れんでいるということだ。

「若者と話すより、老人と話すとずっと心が落ち着く。俺も早く年をとってしまいたいものだ」

少年は若者と話す時いつも思うのだ。

「老人はいつも人に心の内をいつもさらけ出している気がする。若者はいつも泥の化粧を面に塗りたくって、自分を隠そうとしている気がする」

精神と体はよく一つだというけれど、老人は体が弱くなってますます優しくなっていく。不思議なものだ。

人はいつも泥化粧をしているものかもしれない。でも老人は恥をかかれ、よく身の程を思い知ったのだろうか。それできつと化粧はいつも泥だと思いつたのだろう。泥の化粧は見苦しいばかりである。自分を醜く見せているということが気づかない。それがきつと若者なのだろう。

少年は小さいころ祖母に育てられた。物心ついたころにはもう祖父は死んでいたらしい。

けれども祖母のやさしさと厳しさと穏やかさにいつも学校から帰ってくるとなにか祖母に期待していた。それは同級生と話すのがおっくうでしようがなかったのである。祖母の静々とした態度にいつも好奇的な気持ちを寄せていた。

少年は小学校のうちにも同級生の馬鹿らしさに飽き飽きしていた。同級生はいつも楽しいことばかり考えていただろうが少年は自分達の幸せのために他人を虐げる姿が気に食わなかった。彼は自分が正しい公正な判事な気持ちでいた。彼はただ誰も傷つけたくない

気持ちでいた。彼は本当に正しい判事のようにだった。

だがそれでは反発するような輩がいるのであった。

彼はいじめにあったがそれでも正しいことばかり考えていた。自分達のために他人を虐げる考えが常人にはある。しかし彼はこう思っていた。

「憲法、法律のいうところの自由とは、他人を傷つけるための免罪符ではない」この言葉を胸のどこかで溜め込んで中学校も高校も過ごして言った。

彼は大学生になって恥ずかしい気持ちでいるようになった。小さい頃考えていた自分の考えが、正しいとわかっていた自分の考えが全く違うものだとわかったのである。

人はいつも誰かを見下していないと自尊心を保てないし、今度は誰かに虐げられることになる。それに人は道德を常に古着にしている。人は結局人を胸のどこかで馬鹿にしていないと、居ても立ってもいられない気持ちになるのである。

それが彼にはわかったときは彼は本当にくすぐったい気持ちで、小さい頃を思うと彼は本当に居ても立ってもいられない気持ちになるのだった。

彼は自分の考えがいかに愚かで馬鹿馬鹿しい、生真面目な考えである事が彼には苦しかった。自分が考えていたことがまるで人に馬鹿にされ、踏みにじられた気持ちだった。

彼は大学生になって、電車で通学することになった。そこで割り切った考えを持てるようになった。それはたくさん人の、どこかあぐどい考えを一度に感じたからである。

彼は人を見るのがいやになっていた。心のどこかでいつも自分が馬鹿にされている気持ちになった。人と目が合うたびに彼は心が読まれている気持ちになった。

彼は人と話すとどこかうれしい気分になるようになった。弱肉強食のような若者の話し方の輪の中に入れた気持ちになった。

「俺でもまともに話せばちゃんと人と分かりあえるのだ。なんだ簡

「単なことさ！」

そのことがとても彼には心地よいのだった。

彼は毎日思うのだ。俺は人と分かりきった簡単な話をする事ができないのではないかと思っっている。彼は毎日

「俺はもしかして人とまともに話し合うことができないのではないか」

彼はなによりも其の事が心配であった。人前で、オタクのようにおどどしたそぶりを見せるのではないかと考えた。

「俺でもまともに会話できるんだぞ！」

そのことをだれにでも自慢したい気さえ起きていた。

彼は町を歩く時いつも道行く人の顔を覗くようになっていた。心を読まれた世間に仕返しのためにも、心を読んでみようと考えているようになった。それは非常に幼く、馬鹿馬鹿しい遊びだった。彼は人の心を読みたくなるほど気持ちに余裕が出るようになっていたのである。

彼は世間に仕返しをしたい気持ちになっていった。小学校のころに自分をいじめたやつら、まともに干渉しようとしなかったやつら、そういう人々に仕返しを世間にする的外れな考えが生まれていた。

彼は始めに家に配給される牛乳を盗み飲んだ。それは大したことのないイタズラに過ぎないのだが、彼には第一歩であった。

彼は次にコンビニのドリンクを盗み飲んだ。小さな遊びが彼には第一歩なのだ。

彼はただ何も小悪党を演じるためにこんなことをするわけではない。彼は始めは処女の如く後は脱兎のごとしのつもりであるのだった。

彼は人に会うたびに睨みをきかせるようになった。それはただ世間に対する仕返しの義務ではなかった。人々にたいする恨みだった。少年のころ考えた老人への憧れ、他人がまったく老人のようではなかったこと、話し合ってよくわかる若者が他人に対する虐げ、それらに対する的外れな恨みが彼には分かりきっているのに耐えられなかった。

彼はますます盗みに対する関心を深めていった。空き巣、万引き、

強盗に手を染めていった。

盗みは彼には快樂だった。店員にいかに見られず仕返しを実行することが、死角を利用して、店員の油断を利用して、客の影を利用して、性欲のようなウズウズと小気味のいい感覚が足を支配していた。彼は義務的に始めた仕返しに魅了された。彼は女子高生のように万引きを楽しむのだった。

空き巣は彼には合わないようだった。彼は空き巣をするたびに祖母を思い出すようだった。やさしくて惹かれるような光をもっていた祖母。彼は祖母のことを考えると空き巣に身が入らず、足が震えた。彼は想像したほど悪党にはなっていなかったのである。彼は祖母を思い出すたびにこう考えるようになっていた。

「だれでもみんな少なからずとも人を見下して傷つけあいながら生きていくんだ……。老人のようにはならない人々ばかりだ。あいつらは！少しは自分の身をわきまえればいいのに。そうすれば俺だって復讐を考えなかったらうに」

彼は的外れな恨みを持っているが彼はまったく仕返しを復讐だと考えていたのである。小さい頃から考えていた幼稚な正しさ、それがうけいられなかった。

人々はいつも正しい事を受け入れないものである。それがたとえ簡単で子供でもわかる理論であったとしても人々は受け入れようとしないのである。このことは彼には信じられないことだった。幼い彼には衝撃的に違いない。人間にはこういう矛盾した性質がある。正しいと分かっているにもかかわらず実行しようとしなない。たとえ大人であっても子供であってもそれは変わりようのないことだった。

彼はそのうち仕返しをしたくなくなっていた。やはりそれが仕返しではなく自分が虐げられた分の、うつぶんを晴らしていただけなのだった。それが分かったことは彼には衝撃的だった。彼は仕返しにはもう興ざめだった。

「ああ、馬鹿馬鹿しいなにもかかもが空々しく思われる。世間も人々も俺にはただの白いマネキン、歩くあやつり人形だ」

彼には何もかもが無関心に感じていた。彼は人を睨むことも、盗みを働くことも楽しみを感じなくなっていた。

彼はただ生活のために盗みをするようになった。

苦しみも楽しみもない無機質な感じがした。

彼は自分のしている罪を罪と思っていなかった。だがだんだんと彼は自分の罪が彼には見えてきたようだった。何かの本でみた神の話、目には目を復讐には復讐。復讐の神にはゼウス神でもかありません。。。

彼は空き巣に入った時ある失敗をしていた。誰もいないと思っていた家に妊婦が居たのである。彼は妊婦を刺した。手にはゾクゾクとした感覚が残っていた。あっけなく妊婦は死んでしまった

彼は復讐という言葉を考えて。考え続けた彼には苦だけが残った。

彼は復讐の神に怯えた。世の中に復讐したつもりが復讐されるとは考えてもいなかった。彼は死の病にかかり、寝込んだ。

彼は世の中を不公平に感じた。

「俺は小さいころ正しかったはずだ！世の中がまちがってるはずだったのだ。それをなぜ俺が復讐されなければいけないのだ。間違っているこんなはずでは！」

彼は復讐の神がなぜ幼い頃手伝ってくれなかったか考えた。彼はどうして世の中がこうも不公平なのかと苦悩しただけだった。彼は死ぬ前にこう呟いたという。

「・・・正しかった・・・」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1248b/>

---

hakusin

2011年1月15日22時05分発行